

氏名	土 肥 範 勝
授与した学位	博 士 学
専攻分野の名称	歯 学
学位授与の番号	博 甲 第 2 4 9 1 号
学位授与の日付	平 成 1 5 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件	歯学研究科歯学専攻(学位規則第4条第1項該当)
学位論文題名	歯科における行動科学 — 予期不安と鼻部皮膚表面温の関係 —
論文審査委員	教授 松尾 龍二 教授 栗屋 剛 教授 下野 勉

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究目的】

健康の保持増進のために行われる歯科診療に、患者自身の自由な診療への参加を促す目的で広くインフォームドコンセントが行われている。しかし、一部の患者においては過去に行った治療経験や治療行為にいたるまでの説明などにおいて不安や恐怖を与えてしまう可能性も有している。あらかじめ説明を行うことは歯科治療に限らず治療行為を行う場合であれば不可欠なものであるが、患者の性格によっては同様の説明が嫌悪感を与える場合や、いつ説明するかによっても術者に対する不信感や治療に対する不安や恐怖を与えかねない。歯科診療における受診回避の一因として、過去の治療経験に基づく不安や恐怖などが挙げられており、受診回避している患者を減少させていくためには、治療に対する不安や恐怖を軽減させていくことが重要である。一般歯科臨床においては、医療従事者－患者間の信頼関係を確立し、患者が治療に対して持っている不安や恐怖を解消し同意、納得の上で受診できるような内容のインフォームドコンセントが求められている。しかし、インフォームドコンセントのあり方を行動科学的に考えた研究は見当たらない。そこで、相互実習の一環として行う浸潤麻酔実施に際して、インフォームドコンセントのあり方を検討する目的で告知に伴う予期不安が、術前および術後の患者の心理的、生理的に与える影響を検討した。

### 【対象と方法】

実験は、事前に浸潤麻酔の実施を説明した群(以下、インフォームドコンセント群)と浸潤麻酔の実施については説明しなかった群(以下、コントロール群)において実際、浸潤麻酔を実施した。

被験者は、本大学の臨床実習生および、小児歯科学講座に所属している実験参加に同意の得られた102名(男性55名、女性47名)で構成した。すべての被験者は実験開始直前の心理学的状態を知る目的で「日本版 状態・特性不安検査(STAI)」の記入を行った。記入後には診療台上に仰臥位になりデジタル録音のされた音声の指示に従い鼻部皮膚表面温度の計測を開始した。

内容を指示する音声はあらかじめコンパクトディスクに録音しておき、コントロール群に対する浸潤麻酔の告知を予期不安誘発因子と設定し「刺激アナウンス」とした。また、刺

激アナウンス前の5分間を「告知前安静時間」とし、アナウンスから刺入までを「準備時間」、浸潤麻酔が終了し針を抜いてからの5分間を「術後安静時間」として鼻部皮膚表面温度の変動係数を求めた。さらに、「刺激アナウンス」による生理学的ストレスレベルの指標として「刺激アナウンス」時の鼻部皮膚表面温度から最も温度が下がったところまでの温度差（告知後 RANGE）を求め、生理学的指標として評価を行った。なお、心理学的な指標として Visual Analog Scale (VAS) に時間軸を加えた Time series Visual Analog Scale の記入を行い、「刺激アナウンス」時の VAS 値と、そのコントロールとして鼻部皮膚表面温度計測開始直前の STAI 記入時の VAS 値を求め、被験者が感じた心理学的なストレスの指標とした。

#### 【結果】

STAI からはインフォームドコンセント群、コントロール群において状態不安、特性不安共に有意差は認められなかった。また、状態不安と特性不安との相関関係についてはコントロール群においてのみ正の相関関係を認め、インフォームドコンセント群においては相関関係を認めなかった。

VAS を用いた刺激アナウンス時の心理学的評価と変動係数からインフォームドコンセント群は STAI 記入時、刺激アナウンス時において VAS 値に差を認めなかったが、コントロール群においては刺激アナウンス時が STAI 記入時よりも有意に高かった。STAI 記入時についてインフォームドコンセント群とコントロール群を比較した場合においては両群に有意差は認めなかったが、刺激アナウンス時においてはコントロール群のほうがインフォームドコンセント群よりも有意に高かった。鼻部皮膚表面温度の変動係数から、インフォームドコンセント群においては術後安静時間において、告知前安静時間、準備時間よりも有意に高かった。コントロール群においては、告知前安静時間、準備時間、術後安静時間の全ての変動係数に有意差を認めた。告知後 RANGE については、術前に浸潤麻酔の実施については説明されていないコントロール群のほうが浸潤麻酔の説明を受けているインフォームドコンセント群よりも有意に高かった。

#### 【考察】

予期不安を生じたコントロール群においては刺激アナウンス後の準備時間から変動係数に大きな差が認められインフォームドコンセントが行われず術中に心理的なストレスが加わった場合には、心理的、生理的に大きな変化が認められることが明らかになった。この結果から、患者に対し十分に説明を行った上で理解し納得できるようにインフォームドコンセントを行うことによって、歯科診療時の不安や恐怖などを軽減することが可能であると考えられる。

## 論文審査結果の要旨

本研究は、歯科臨床におけるインフォームドコンセントのあり方について、説明の実施時期の違いにより、予期不安の発生および情動変化に及ぼす影響を心理学的、生理学的指標を用いて検討したものである。対象は研究参加に同意の得られた岡山大学歯学部附属病院小児歯科医局員および臨床実習生であり、臨床実習生においては浸潤麻酔相互実習の一環として実験に参加した。対象者は2群に分けられ、一連の相互実習の開始前に浸潤麻酔相互実習の実施を説明しておき実験を開始したものを対照群とし、実験開始前には浸潤麻酔の相互実習を知らせず、浸潤麻酔5分前にその旨を知らせたものを実験群とした。浸潤麻酔相互実習実施を含む一連の実験系はデジタル録音された音声によって指示が出されるようにしておき全ての被験者に同様の指示が出るようにした。被験者の心理学的、生理学的変化は心理学的指標として Visual Analog Scale (VAS) に時間軸を加えた T-VAS、および日本版 状態・特性不安検査 (STAI) を、生理学的指標としては鼻部皮膚表面温度を5秒おきに記録し評価を行った。

実験群においては実験中の浸潤麻酔の説明により予期不安を生じ、浸潤麻酔相互実習の説明を行った直後において心理学的に大きな変化が認められた。さらに、術前に浸潤麻酔相互実習の説明を行っておいた対照群においても術後において実験群よりも大きな生理学的変化が認められ、術後における情動変化においても適切な対応の必要性が求められる事が示唆された。

以上のように、本研究は歯科医療におけるインフォームドコンセントのあり方について患者の心理学的、生理学的変化の検討を行い新知見を示した重要な研究であると考えられる。従って、本申請論文は博士（歯学）の学位授与に値するものと判断した。